

二者間の会話における時間軸移動によるテーマ展開について

～ラジオパーソナリティとリスナーとの会話をもとに～

宮本 淳子

1. はじめに

本稿では、ラジオ番組の音声データ資料をもとに、ラジオパーソナリティとリスナーにおける二者間の会話について、「スムーズな会話」と「ぎこちない会話」の個別の事例を対照的に並べ、両者の違いを発話の結束性・テーマ展開・会話全体の整合性という観点から構造分析することで、スムーズなテーマ展開に有効な方法を探っていく。

会話を「続けよう」と意識したとき、無理に話題を見つけて「ぎこちない会話」になってしまった経験は多くの人にあるだろう。ただ無理に見つけた話題であっても、その話題を選んだ理由やきっかけは必ずどこかにあるはずである。本稿では構造分析を補うために、パーソナリティの視点から会話を振り返ることで、「スムーズな会話」と「ぎこちない会話」の違いに心理面からもアプローチし、両者の違いを検証する。

以上のケーススタディを踏まえ、ラジオ番組でのパーソナリティとリスナーの会話において「時間軸移動」によるテーマ展開の有効性を提示していく。

2. 音声データ資料について

2-1 各ケースの番組・コーナー名・時間・パーソナリティの説明

K-MIX（静岡エフエム放送）における生放送番組を録音したもの

ケースⅠ：スムーズな会話の例

2012年2月23日 K-MIX Brand-New Junction 内のコーナー

「来来电」・・・午前9時23分～9時26分

ケースⅡ：ぎこちない会話の例

2008年4月23日 K-MIX Brand-New Junction 内のコーナー

「ジュンコーリン」・・・午前9時22分頃～25分

ケースⅢ：スムーズな会話の例②

2012年1月19日 K-MIX Brand-New Junction 内のコーナー

「来来电」・・・午前9時24分～9時26分

ケースⅠ～Ⅲの担当ラジオパーソナリティは全て筆者本人である。

筆者は当時、ラジオパーソナリティを職業としており、この番組は2008年4月から2012年3月末まで担当していた。

2-2 コーナー概要

放送当日の番組内で、あらかじめキーワードを発表し、そのキーワードとそれにまつわるメッセージをメールで番組に送ってもらう。コーナーが始まると同時に、エントリー者の中

から抽選で選んだリスナーへスタジオから直接電話をする。この時、事前の打合わせは全くしていない。(電話をかけた後、相手が出るまでのコール音も放送されている。) パーソナリティの手元にはエントリー時のメールはあるものの、その他の情報はない。会話の時間は、その日の進行具合により異なるが、3分～4分を想定している。

番組の進行上、このコーナーの終了の時間には制約がある。(話が長くなれば、どこかで必ず話を終了させる必要がある。) 進行に関しては(質問も含め)全て、パーソナリティ本人が考えており、ディレクターやプロデューサーなど第三者による指示はない。

生放送で展開される台本のない二者間のやりとり(しかも一人はリスナー=いわゆる素人)は、ラジオというメディアにおいてライブ感を最大限に打ち出した演出であり、筋書きのない会話の舵取り役となるパーソナリティには、「喋り手」というより「聞き手」としての能力が問われることになる。

コーナー内の基本的な会話の流れは【挨拶・導入部】→【キーワード回答部】→【キーワードにまつわる話】→【終結部】である。

2-3 会話の特殊性について

以上のことを踏まえ、本稿でとりあげる会話(談話)の特殊性について示しておく。P=ラジオパーソナリティ(以下Pと記す)とL=リスナー(以下Lと記す)の二者間の会話は、ラジオというメディアにおいて行われているものであり日常会話(ordinary conversation)ではなく社会的相互関係における会話(talk in interaction)、つまり制度的会話(Drew & Heritage, 1992)と言える。

ラジオというメディア(公共の電波)での会話であることから、不特定多数のリスナー(第三者)が聞いていることを前提に、両者ともプライバシーを侵害しないよう発話には一定の配慮があり、特にLについては匿名性が厳守されている。そして、Lの発話に関しては、公共の電波に自分の声が出るという非日常の場面であり、そこには個人差はあるものの、精神面でのプレッシャーがあると思われる。

また、Pにおいては、日常会話に近いやりとりをしているように聞こえるが、これらの会話はPにとって「仕事」(自分の喋りが「商品」)であり、それが自身の社会的評価に直結する点で日常会話とは異なる精神状況にあると言える。しかし、いわゆるニュースインタビューと違い、「私的」なニュアンスの言葉が積極的に用いられ、一般的なニュースインタビューでは中立性を保つ為に排除されるはずの「すごい」「えー」といったニュースマークや「うん」「ええ」といった継続促進語などが多く見られる。

つまりPは、これが仕事としての公的な会話であることや番組上、時間的な制約があることを念頭におきながらも、日常会話に近い、ごく自然な二者間の会話を当事者の一人として「演出している」といえる。ここには、日常会話とは似て非なるラジオパーソナリティとしてのスキルが存在すると言える。

尚、このコーナーにおけるパーソナリティとリスナーの会話では、いわゆる隣接ペア(adjacency pair)の「質問-応答」が繰り返されており、パーソナリティが質問-リスナーが回答という関係で会話が進んでいく。日常会話では話者交替(turn-taking)の中で、質問-回答の立場の逆転が生じるが、本ケースは、いずれもパーソナリティが自身の職業的立場を意識し、常に聞き手の役割を担っていることから、質問-回答の立場の逆転がみられな

いのも特徴である。

3. 「まとまりのある会話」について（ケース I）

まずは、筆者にとって「まとまりのある会話」ができ、インタビュー後に満足感があったケースについて構造分析する。本稿の構造分析については二者間の会話を、それぞれの発話の結束性 (cohesion) や整合性 (coherence) (Halliday & Hasan 1976) の視点から考察していく。

ケース I の会話は次に示す通りである。

【2月23日 放送分より】

- 01 P：ハッピーデリバリー 来来电です。当選候補者の方に・・・
(電話が繋がる)
- 02 L：はい
- 03 P：もしもし
- 04 L：はい
- 05 P：私 K-MIX Brand-New Junction の宮本淳子と申します。
- 06 L：おはようございます。
- 07 P：おはようございます。
- 08 L：いちごちゃんです。
- 09 P：あーいちごちゃん！自ら名乗りを上げてもらって、
- 10 ありがとうございます。
- 11 ラジオネームいちごちゃん、さあ、あの今日は雨ですけど、
- 12 どちらにお住まいですか？
- 13 L：西区です。
- 14 P：浜松市の西区
- 15 L：はい
- 16 P：やっぱり西区の方も雨降ってますか？
- 17 L：すごいですね 子供たちがすごい心配です。
- 18 P：あ、そうですね もう登校されましたよね
- 19 L：はい
- 20 P：あーね ちょっとね、道すがら あのー心配ですよ
- 21 こういう日はね。そんな中 いちごちゃんは
- 22 ふるってエントリーをして下さいました。ありがとうございます！
- 23 L：いいえ
- 24 P：では はりきって キーワードを どうぞ
- 25 L：1 番！
- 26 P：(拍手) おめでとうございまーす。
- 27 L：ありがとうございます。
- 28 P：いやー 昨日 この来来电 なかなか電話繋がらなかったんで
- 29 今日はトップバッターで当選で 嬉しいです。
- 30 L：すごい 私も嬉しいです。まさか 初めて投稿したんで！
- 31 P：初エントリーでしたか！
- 32 L：はい
- 33 P：あー ビギナーズラック！では いちごちゃん、
- 34 今日はコーヒーの川島からコーヒーセット お届けしますので
- 35 楽しみにしていて下さい。
- 36 L：はい。ありがとうございます
- 37 P：一番エピソード 今日はどうな事 書いて下さったんでしょうか？
- 38 L：そうですね、私の趣味のパン作りのことについて
- 39 P：はい
- 40 L：はい。息子に失敗したパンを食べさせたら
- 41 P：はい
- 42 L：ママの作ったパンだったら すごく美味しいよ
- 43 一番だよって言ってもらえました！
- 44 P：なんていい息子さん！・・・でも失敗したんですね、そのパン・・・

45 L：はい なんか クリームに火が入りすぎてしまって
 46 P：はい
 47 L：ちょっとぼそぼそって こう かたまったプリンみたいな感じに
 48 なってしまったんで
 49 P：クリームパンで・・・
 50 L：はい
 51 P：わかります（笑）なんか ボソボソってしちゃうのね クリームが
 52 あの トロツとしなかった
 53 L：そうですね
 54 なんか ガムみたいなハイチュウみたいな感じのクリームに
 55 なってしまって
 56 P：そこまで！
 57 L：はい。なんか ちょっとね 後ろを振り返っている間に
 58 あーって 気がいたら焦げてて もうなんか 塊で・・・
 59 P：そうですか。でもパン作りが趣味ということは
 60 また作る予定も近々ありますか？
 61 L：そうですね。今 作りながら・・・
 62 P：おー！
 63 L：聞いてるんです
 64 P：今日は何パンですか？
 65 L：チーズケーキブレッドっていう
 66 P：はい
 67 L：チーズクリーム チーズケーキのクリームが入った白パンですね
 68 P：美味しそう！
 69 L：すごく美味しいです
 70 P：それは ランチになるんでしょうか
 71 それとも何かおやつ的なものになるんでしょうか？
 72 L：そうですね・・・子供のおやつですね
 73 P：これは 早く帰ってきてほしいですね
 74 L：はい
 75 P：はい。では、あの 今日は無事成功しますように祈ってますね。
 76 L：はい ありがとうございます
 77 P：はい。いちごちゃん どうもありがとうございました。
 78 L：はい。ありがとうございます。
 79 P：失礼します。

3-1 ケース I の結束性と整合性について

(01-23行)はこの会話例における導入部、(24-36行)はキーワード回答部である。その後、キーワードにまつわる話(37-76行)が展開され、終結部(77-79行)に至る。会話の中心となる(37-76行)においては、テーマ1(T1)「失敗したパンについて」(37-58行)とテーマ2(T2)「今、作っているパンについて」(61-76行)の2つのテーマが認められる。T1、T2それぞれのテーマ内における会話の結束性とT1、T2のテーマ間のつながりを中心に、構造をみていくことにする。

まず、T1ではPのキーワードにまつわるエピソードの提示要求(37行)に対し、Lが情報を提供(38-43行)。これに対しPは息子を褒めるものの「失敗したんですね」(44行)と語ることで、話のテーマを「パン作りに失敗したこと」に設定している。するとLは失敗の内容を詳しく説明(45・47-48行)。これに対しPは失敗したパンの種類を確認(49行)する。これは、Pによるあいづち(46行)を挟んでのLの説明(45・47-48行)を聞いたPが「(それは)クリームパンで(すよね?)」と、確認の質問をしているのであり、(45・47-48行)とつながりの強い発話であると理解できる。これに対しLが回答(50行)、それを聞いたPは共感の反応(51・52行)を示す。すると、その反応にLは更なる共感(53行)を示しつつ、失敗の状態を追加説明(54-55行)、Pの反応(評価)「そこまで！」(56行)を

挟んで、失敗に気づいたときの状況を説明している。情報提供者であるLは、一つ一つの発話こそ短いものの、終始、「失敗したパン」についての新規情報を語っており、Pの質問にLが回答、それに対してPが反応（51・52・56行）という発話の連鎖によって、T1の整合性が生み出されている。

筒井（2012）によれば、評価の発話は、雑談を持続させていくことに関して重要な役割を担っていると言うことができ、その点でもPの肯定的反応としてのあいづちが会話の自然な流れに大きく寄与していると考えられる。

こういったT1におけるPとLの会話は、失敗したパンについての話であることが大前提となっており、いわば二者間にはテーマについての暗黙の了解が常にあると推測できる。このような意識の共有がT1の整合性を生み出しているのである。

このあと、Pの質問（59・60行）「また作る予定もありますか？」によって、会話のテーマはT1の「失敗したパン」からT2「今、作っているパン」へと展開する。つまり、テーマ展開に際し「時間軸移動」による質問が用いられている。この時間軸移動による質問（59・60行）は「Lとパン作り」に関するものであり、常識・推論的なつながりを持つことから、整合性のあるテーマ展開がなされている。

そして、この質問に対する回答（61-63行）「今、作りながら（ラジオを）聞いている」がT2におけるテーマとなり、会話が進んでいく。T2において、まずはPの質問（64行）「今日は何パンですか？」から、Lが具体的なパンの名前（65行）を語る。Pのあいづち（66行）を挟んでLは詳細説明（67行）を続ける。その後のPの反応（評価）「美味しそう！」（68行）は、「（そのパンは）美味しそう！」の意味であり、これを受けたLの発話「すごく美味しいです」（69行）についても「（そのパンは）すごく美味しいです」と推測できることから、省略された部分が一致している。つまり暗黙の了解とも言える共通認識がはたらいっていると推測でき、それが会話の整合性を生み出していると考えられる。この後の質問（70-71行）の「それ」も「今、作っているパン＝チーズケーキブレッド」であり、それまで同様T2におけるテーマが意識されることで、一文一文の結束性が生まれている。T1同様、Pが質問（64・70-71行）し、Lが回答（65・67・69・72行）、それに対しPが反応（あいづち66行・評価68行・意見73行）する形で新規情報が引き出されており、「今、作っているパンについて」という共通認識で、全ての発話がつながっている。ここでもPとLには、テーマについての暗黙の了解があると推測でき、T2の整合関係が形成されている。

そして「Lとパン作り」を対象とした時間軸移動として、次に会話が開発するのは終結部へと会話を導くPの発話（75行）である。これは「今日（T2）は（T1のように失敗せず）無事成功しますように」という意味であり、T1とT2を対比する形の「今日は」を用いることで、それまでのキーワードにまつわる話（37-74行）を一気にまとめている。「今、パンを作っている」ことを踏まえて、そのパンが完成するであろう近い未来を想定した発話である。

相手の行動提示による終結部の開始については堀口（1997）で言及されているが、このT1とT2をまとめる包容力のある発話が、二者間の会話において終結部への流れをつくる接着剤のような働きを果たし、会話全体の整合性を生み出す役割を担っていることが分かる。ケースIでは時間軸が「過去-現在-未来」と移動し、時間軸を移動させる各質問が二者間の会話における自然な流れ作りに寄与していることが分かる。

3-2 筆者のPとしての視点から

ここで、現場での状況を思い出しながらPである筆者の視点（心境）から、この会話を振り返る。

まず、(01-07行)はこのコーナーの通常通りの流れである。ただ、オーソドックスなコーナーの流れとしては、このあと「ラジオネームを教えてください」と名前（呼び名）についての質問を筆者がするのだが、このケースではLが自ら名乗っている（08行）。通常と流れが異なったことで（09行）の反応をしているが、そこでLの発信能力の高さを感じた上に声の明るさから会話への積極性を感じた筆者は、通常より導入部を長くとり、より親近感を出そうと試みている（11-23行）。実際、（10行）から（24行）へ移っても（11-23行を省略しても）スムーズに会話を進行できるわけだが、このケースでは、敢えて形式的な会話進行モデルを崩す形で（11-23行）の導入部を展開し、このコーナーにおけるワンパターン化やマンネリ感を軽減しようとしている。もちろん狙いはそれだけではなく、筆者と初めて話すLに少しでも親近感を持ってもらうためでもあり、ラジオ出演による緊張感を和らげることも狙いであった。また、こういった会話によって、その後の自然な会話につなげていきたいという演出上の狙いもある。この日は激しい雨が県内全域で降っていたことから、容易に共感を得られるであろう「天気」を題材に選んでいる。

しかし、（16行）の質問について、Lが「そうですね」といった共感の返事をしてくれるであろうと予想していた筆者に対し、Lは共感の「すごいですね」に加えて「子供たちがすごい心配」と、想定外の反応をしてきたのである。それゆえ、（子供たちのことを尋ね始めると、なかなか本題に入れなくなる恐れがあることから）少々動揺して、その後の筆者の発話（20-21行）がしどろもどろになってしまったのだが、必要以上に脱線した話にならないよう、（24行）によって話をコーナーの本題に戻すよう会話の軌道修正を行っている。ちなみに、このケースでは、定型を崩した導入部の中でLから子供の話（17行）が出てくる。「心配するくらいだから、まだ小学校低学年のお子さんがある主婦かな？」というおおよその人物像も分かり、定型を崩した甲斐があった。この時点では分かっていなかったのだが、この後、キーワードにまつわるエピソードが親子に関する話であったことから、この導入部が功を奏することになった。キーワード回答部（24-36行）で注目すべきは、Lの反応（30行）である。「まさか 初めて投稿したんで！」という $+ \alpha$ の情報を提示するLの発信力の高さが、ここでも伺える。ゆっくりとしたおだやかな口調ではあるが、声も大きくはっきりとしていたこともあり、筆者は、その後の会話の中では、あいづちをうちながらLの発話を「待つ」スタイルで、会話を展開している。このコーナーは筆者が「聞き手」として相手の言葉を引き出さなければならないのだが、どちらかというと筆者の発話が多くなりがちであり、それをできるだけ改善しようと質問の仕方を試行錯誤する中で、このように相手の話し方から相手に効果的な「聞く」スタイルの確立を模索していたのである。

「聞き手」として状況をしっかり想像できるように核心となるような情報が抜けている場合は補足となる「あいづち」を入れている（49行）。このコーナーのリスナーによる発話で注意すべき点の一つに、「既に言ったつもり」「伝わっているつもり」で話してしまうケースがある。リスナーはキーワードにちなんだメッセージをメールでエントリーする際に多かれ少なかれエピソードを文章にして送っている。そのためか、電話で（生放送中）話をするときに、肝心な言葉が抜けることがあるのだ。この場合、失敗したパンは焼き過ぎたわけでも

膨らまなかったわけでもなく「クリームに火が入りすぎてしまった」という失敗だったのだが、何パンを作っていたのかが不明な為、筆者は（49行）で確認をしているのである。こういった、確認的なあいづちによって、筆者は「あなたの話をしっかり聞いていますよ。」というメッセージも送っているつもりであった。

また、起点となるトピックの面白さを高めるため（失敗の度合いが大きいほど、子供の発言の面白さが際立つと思ったので）（56行）のような反応をしている。

つまり、筆者の頭の中では、常に（37-43行）を意識しつつ会話を進めていたわけである。その質問に答えるLは、必然的に起点となる（37-43行）にちなんだ話をする事になり、二者の念頭に（37-43行）の共通認識があるからこそ、一つ一つの発言のつながりが強くなっているとも言える。

そして一通り状況が把握できたところでテーマを変える質問（59・60行）をするのだが、「パン作り」という共通項を持たせることで、自然なテーマ展開を心がけた。テーマを変える（展開させる）場合には、会話の流れから、いくつもの質問の選択肢が生まれる。例えば本ケースでは、「失敗」という共通項で「これまでも、そんな失敗をしてしまったことがあるんですか？」といった質問や「その時の息子さんの表情は？」「一番だよ！と言われたときの気持ちは？」といった質問も考えられる。瞬時に、より良い質問を選ぶのは難しいことだが、このコーナーは時間も限られていることから、通常のインタビューとは、選択肢の選び方に違いがあることも言及しておきたい。時間に制限がないのであれば、パン作りの失敗談を、もっと詳しく聞きくことで、会話を継続させる方法も考えられる。ただ、3分程度の会話であれば、少し違う視点の会話を展開することで、会話の幅を広げることも重要である。そこで筆者は質問（59・60行）をすることで、トピックの展開を図っている。展開後の会話においては（72-74行）で息子への言及があることが導入部やT1とのつながりを感じさせ、全体のまとまりを生み出す大きな要因になったと考えられる。筆者の発言（73行）「これは、早く帰ってきてほしいですね」も、（17-22行）（激しい雨の中、学校に行った息子たち）を意識しているものであるが、一方で筆者の意図としては、相手に「そろそろ会話終了ですよ」というメッセージを、こういった表現を用いて伝えることが多かった。このケースも、まさにそうである。つまり、いくつかのトピックで会話が展開された場合、目の前の会話や会話節ではなく、少し前の会話節や会話全体を振り返るような言葉を用いて「まとめ」表現をするのである。

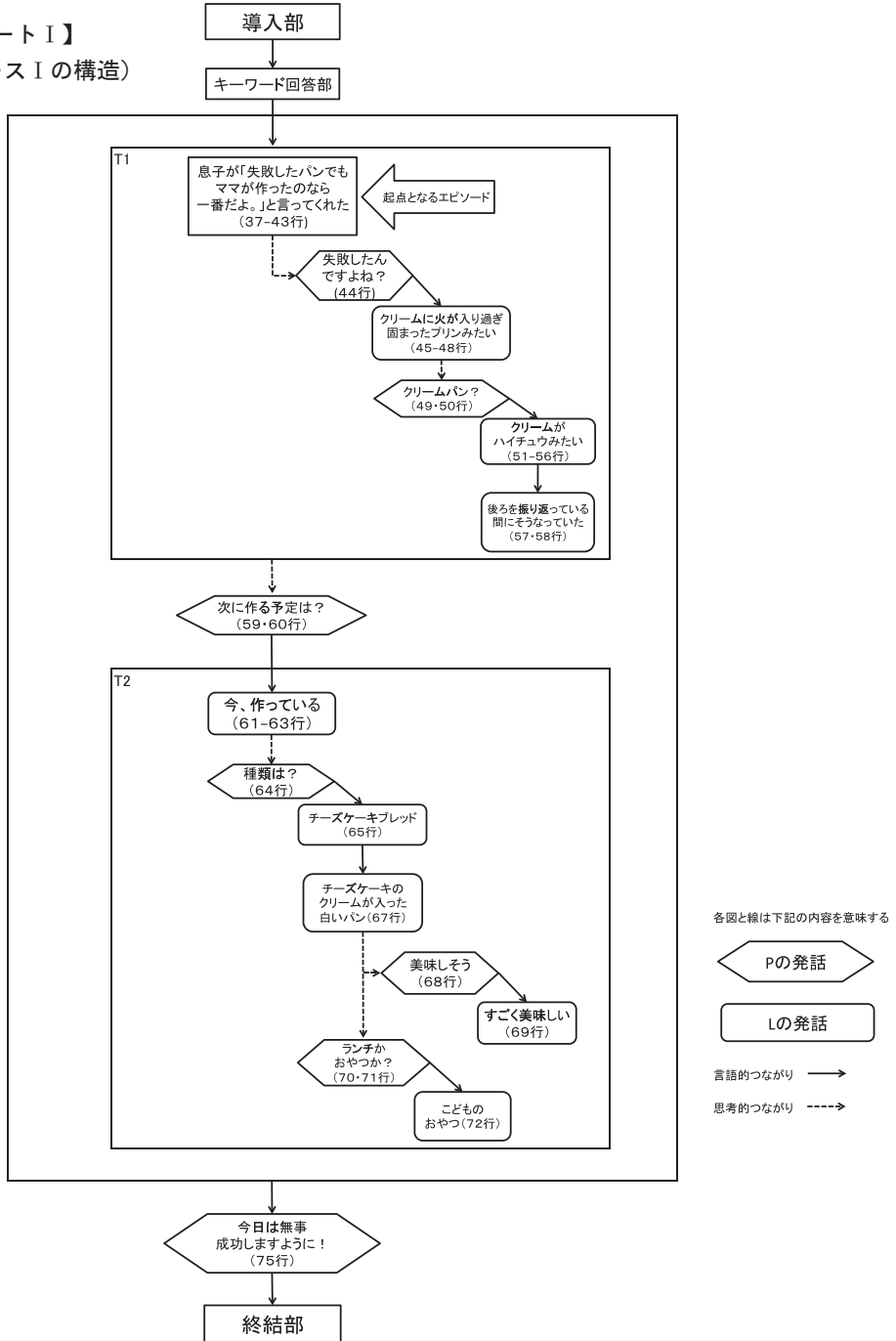
不思議なことに、こういった「会話を振り返る」一言により、相手も「そろそろ会話が終了する」ことを察知してくれる場合がほとんどであった。会話は参加者による共同作業であるわけだが、暗黙の了解として終結部へ向かう意識がお互いに働くことでスムーズなエンディングになっていることは間違いない。俗に言う「空気がよめない」人の中には、相手が話を終わらせたいのに気づけない人がいる。終結部へと向かう暗黙の了解が成立しなければ、会話は途端にぎこちなくなってしまう。

このケースは、エンディングがスムーズすぎて、少々素っ気ないくらいに感じてしまうが、それだけ自然な流れで会話ができたとはいえるであろう。このケースは会話の当事者としての筆者にとって、会話後の満足度が高いものであった。

3-3 会話のチャート化 (ケース I)

結束性・整合性の観点と P の思考的つながりをもとに、会話の流れをフローチャートで示す。(チャート I 参照)

【チャート I】
(ケース I の構造)



4 「ぎこちない」会話について（ケースⅡ）

次に、多くの情報が引き出されながら、会話の当事者の一人である筆者の感覚としては「ぎこちない」会話だったケースについてとりあげる。二者の会話は次の通りである。

(2008年4月23日放送分)

- 01 P：ハッピーデリバリージュンコーリンの時間です。
02 これからあなたにジュンコーリンします。水曜日は
03 浜松ラスクのモニターニューから浜松ラスクと季節のラスクが
04 当たり・・・（電話が繋がる）
05 L：もしもし
06 P：あ、もしもし
07 L：うわぁ びっくりしたっ！
08 P：私もびっくりしました！
09 K-MIX Brand-New Junction の宮本淳子と申します。
10 L：どうも おはようございます
11 P：おはようございます
12 今、もしかしたら 後ろでラジオかかっていますか？
13 L：あ、あああ 止めました！
14 P：ありがとうございます バッチリですね、ありがとうございます
15 ラジオネームを教えてください
16 L：えー つとんです
17 P：ラジオネームつとんさんですね
18 L：はい
19 P：では つとんさん 今日のキーワードをお願いします
20 L：はい みどり
（拍手）
21 L：うぁー 嬉しっ！
22 P：おめでとうございます
23 L：ありがとうございます
24 P：えー みなさんと一緒に食べられるように セットにして
25 浜松ラスクと季節のラスク 限定詰め合わせセットをお送りします
26 L：ありがとうございます
27 P：楽しみに待っていて下さいね
28 L：はい
29 P：さぁ つとんさん みどりといえば
30 つとんさんにとっては何のみどりでしょうか？
31 L：やっぱり ゴルフ場ですかね ゴルフが好きなんで
32 P：うわー ナイスショットっていう
33 L：そ、そうですね（笑）
34 P：最近も行かれましたか？
35 L：いや ここんとこ ちょっと忙しくて行ってないんですけど
36 P：そうですか
37 次回に あのー ゴルフ場に行く予定っていうのは
38 もう決まっていますか？
39 L：あのー できれば ちょっと 友達が今度2ヶ月ぐらい
40 長期いなくなっちゃうもんで その彼と一緒にいきたいなーと
41 思ってるんですけど
42 P：あーいいですね
43 L：えー
44 P：やっぱり ホールをまわると それだけゆっくと いろいろね
45 お話ししたりもできるし
46 L：そうですね2ヶ月間いなくなっちゃうもんでね
47 P：うーん
48 L：だから そういうとこって ちょっと喋りたいな・・・と思ってます
49 P：はい
50 私ゴルフ場って 実際に あのー ゴルフしたことがなくて
51 行ったことがないんですけど（笑）
52 L：あ、そうなんですか
53 P：あの芝って きれいですよね 見た感じ

54 L：綺麗ですっ！ほんとに綺麗ですよ
 55 もう たまらないっす
 56 P：あー あの 香りっていうのも あの 芝っていいですよ
 57 L：いいですね
 58 P：思わずなんかゴロゴロしちゃいたくなりませんか？
 59 L：なります
 60 P：そうですか
 61 L：はい
 62 P：あの一 もうゴルフ歴は長いんでしょうか？
 63 L：そうですね ぼちぼちですけど
 64 P：ぼちぼち あの スコア的にはどうですか？
 65 L：スコア的には あまり言えないくらいですね
 66 100切ればいいほうで
 67 P：いやー でもでも あの一 何かきっかけがあったんですか？
 68 L：そうですね あの 社員旅行で 沖縄で 初めて ゴルフをやった
 69 P：へー
 70 L：海と緑と もう それで完璧にハマっちゃいました
 71 P：そうですか
 72 L：はい
 73 P：あー 沖縄での 初体験 ゴルフっていうのは
 74 L：はい
 75 P：これ なかなか レアですね
 76 L：そうですかね 僕は これですべてにはまりましたね
 77 P：じゃ それ以来 ずっと続けてらっしゃるということで
 78 L：そうですね
 79 P：ま ちょっとね 動くとだいぶ 汗ばむ季節になってきましたけど
 80 じゃ 思いっきり体動かせるその日がくるまで
 81 L：はい
 82 P：楽しみに
 83 L：ありがとうございます がんばります
 84 P：なかなか会えなくなってしまうお友達にもよろしくお伝え下さい
 85 L：わかりました
 86 P：そのお友達と一緒に食べてもいいね
 87 このモンターニュの浜松ラスク
 88 L：ええ そのつもりです。
 89 P：では お届けしますので 楽しみに待っていて下さい
 90 今日は エントリー 本当にありがとうございました
 91 L：こちらこそ ありがとうございました
 92 P：失礼します
 93 L：はい

4-1 ケースⅡの結束性と整合性について

(01-18行)は、コーナーの導入部、(19-28行)はキーワード回答部であり、それぞれスムーズなやりとりが行われている。その後(29-89行)がキーワードにまるわる話であり、(90-93行)が終結部である。PとLの会話の中心となる(29-89行)においては、キーワードにまつわる一つのエピソード(29-33行)「ゴルフが好きなので、みどりといえば芝」の後、テーマ1(T1)「ゴルフについて」(34-49行)、テーマ2(T2)「ゴルフ場について」(50-61行)、テーマ3(T3)「ゴルフ歴について」(62-63行)、テーマ4(T4)「スコアについて」(64-66行)、テーマ5(T5)「きっかけについて」(67-78行)、テーマ6(T6)「終了部へのつながり」(79-89行)といった具合に、短いやりとりの中で細かいテーマ展開が認められる。テーマは全て「ゴルフ」という大きな共通項で結ばれており、一貫性があるように感じるにもかかわらず、全体の流れを追っていくと、会話としてはどこかぎこちない印象になる。これは、一体どうしてなのだろうか。一文一文の結束性やテーマ間の境界に注目して構造をみていくことにする。

会話の起点となるエピソード(30-33行)のあと、Pの質問(34行)は「(つとんさんは) (ゴルフに) 最近も行かれましたか?」という意味であり、(30-33行)の会話節で得た「つとんさんは、ゴルフが好き」という情報に基づいて質問されている。つまり会話節(30-33行)と結束性がある。これに対する回答(35行)に対して、Pは「次に行く予定」を質問する(37-38行)。これも「(つとんさんは) ゴルフ場に次に行く予定はありますか?」であり、「つとんさんとゴルフの関係」についての質問であるため(34-36行)の延長線上にある、つながりの強い質問である。また、省略されている主格「つとんさんは」において、直前の(34-36行)と結束性がある。つづく(39-41行)は(37-38行)の答え、(42行)は(37-38行)への反応(評価)、(43行)はあいづち、(44-45行)はPの反応(42行)に対する自身による理由説明の発話、Lの発話(46行)は(44-45行)を受けて、自身の発話(39行)の繰り返し(強調)、Pの反応(47行)はそれに対するあいづちである。(48行)の「そういうとこ」は「ゴルフ場」であり、この発話でも(37-38行)の質問「次回、ゴルフ場に行く予定はありますか?」が意識されていることが分かる。

これに対するPの反応(理解)(49行)も含めて(34-49行)は「つとんさんとゴルフの関係」という大きな共通項で結ばれた一連の会話であることが分かる。ここでも二人の間に共通認識が存在すると推測され、その認識こそが会話の整合性を生み出していると言える。しかし、これにつづくPの発話(50-61行)は、「ゴルフの芝」についての会話であり、直前の会話節(34-41行)と結束性がない。この唐突なテーマ展開が、「ゴルフ」という同じ共通項を持ちながらも、やや不自然なテーマ展開となっている理由の一つと考えられる。つまり、(49行)と(50行)の間(T1とT2の間)には、本来「ところで」で繋がる一つのテーマの展開があるといえる。「ところで」のような談話標識が使用されていれば、唐突な印象を払拭できる可能性もあると考える。

さらにT2「ゴルフ場の芝」につづく質問(62行)は「つとんさんのゴルフ歴」を尋ねるものである。(62行)は「(つとんさんは) ゴルフ歴が長いんでしょうか?」であり、主格(つとんさんは)が省略されているが、直前の会話節における主格は「芝は」であり、ここにも結束性がない。つまりT2とT3の間にも溝がある。「ゴルフ」という共通項で結ばれており関連性が全くないとは言えないものの、直前の発話との結束性がないことで、違和感のある質問になっている。

むしろT3は「Lとゴルフの関係」を尋ねるものであるからT1とのつながりが強い。しかもT4での「スコア」に関する問いと回答の後の質問(67行)「きっかけがあったんですか?」は、「スコア」の会話より、その一つ前の会話節にあたる(62・63行)「ゴルフ歴」とのつながりが強い。つまり、ここでは結束性のある発話が直前ではなく、少し前にされることになる。こういったややこしい結びつきが、自然な会話の流れに反しており「ぎこちない」印象を与えてしまう要因になっていると考えられる。

その後は(68行)が(67行)に対する回答であり、(69行)あいづちを挟んで(70行)は(68行)「沖縄での初めてのゴルフ」の補足説明である。(71行)のPの反応(納得)「そうですか」のあと、Pの質問(75行)「なかなかレアですね。」に対し、Lは(76行)「そうですかね」と明言を避けるような言葉で回答するものの、「これで完全にはまりましたね」と付け加えることで(70行)を強調している。(77行)の「それ」は「沖縄での初めてのゴルフ」であり、(67-76行)の会話節と結束性がある。つまり、T5のテーマ内においてはスムー

ズに発話のやりとりが行われている。

(79-89行)は終結部へとつながるまとめの会話であるが、ここでは「次のゴルフの予定」について触れている。つまり、直前の会話節(67-78行)ではなく、(37-49行)を意識しての発話であることが明らかである。それゆえ、ここでも話題の持ち出し方が、唐突な印象になっている。会話の前半で出てきたテーマを繰り返すことで会話を終結部に移行させることについては、堀口(1997)の中で、「話題の呼び戻し」として言語表現による終結部開始の表明の一つとして示されている上、ケースⅠでも取り上げているが、「どの部分を呼び戻すか」は整合性のある会話のまとめとして重要なポイントであり、このケースの場合は、呼び戻しの不自然さが目立つ形になっていると考えられる。

このように、ケースⅡについては、「ゴルフ」という共通項をもちつつも、テーマ間をつなぐ談話標識の欠如や結束性のある発話が一つのまとまりとしてではなく点在していることから、展開がスムーズではない(ぎこちない)という印象になっていると考えられる。

ただ、直前ではないものの結束性のある会話節が含まれていることから、テーマ展開の順番を変えることで、まとまりのある会話になる可能性は十分にあるといえる。

4-2 筆者のPとしての視点から

ここで、ケースⅠ同様、現場での状況を思い出しながらPである筆者の視点(心境)から、この会話を振り返る。

(01-29行)まではスムーズに展開しており、このコーナーの典型的な進行である。キーワードに関する質問(30行)の答え(31行)に対しても少しオーバーではあるが(32行)のような反応も許容範囲と思われる。つづく質問(34行)をした時点で筆者の意識は「みどりといえば芝」ではなく「ゴルフ」へと向かっている。「芝」についてよりも「ゴルフについて」の方がお互いに話し易いのではと考えたからだ。これは、相手本人にまつわる話の方が、話しを引き出しやすいという経験値に基づく選択である。質問(37行)「次回の予定」については、現在の筆者なら、この段階ではしない質問である。おそらく、今ならここで(62行)「ゴルフ歴」や(67行)「きっかけ」の質問をするであろう。その方がLとゴルフの関係性を詳しく知ることができるからだ。ただ、当時は、「最近は行っていない」といわれ、次に即座に思いついたのが「次はいついくか?」という質問だったと思われる。ところが、タイミングはどうであれ、この質問は相手から興味深い新情報(39-41行)を引き出すことになる。残念なのは、当時の筆者がその発話(39-41行)に対して的外れな反応(42行)をしていることである。Lの発話(39-41行)を受けたとき、客観的に発話を理解しようとする。「2ヶ月会えなくなるのはどうしてか?」「その友達とは、これまでもゴルフに行ったことがあるのか?」「Lと友達の関係は(同僚なのか、学生時代の友人なのか?)」といった素朴な疑問が浮かび上がってくる。ゆえに、本来(39-41行)のあとには、そこを補足説明してもらおうような問いがあってしかるべきであり、それが自然の流れである。しかし、当時は、この番組を担当したばかりで緊張していることもあり、Lとその友人の関係を聞く=プライベートに関わる発言にならないかという心配や、Lが敢えて理由を伏せているのではないかという憶測などから、疑問点を全く無視して、別の話へとトピックを展開してしまう。そしてその結果、筆者の意識は、直前のLの話より、次はどんな質問をしようかといったところに向いてしまっていたのである。しかも、その後展開される「芝について」の会話節では、

筆者が語ったことにLが同調する形で話が展開し、(相手の言葉による新規情報をひきだすことができず) 筆者が一方的に話している雰囲気が強くなってしまっている。

芝についての会話もそれほど長く続かず、ゴルフ歴についての質問(62行)をしてしまう。トピックが大きく変わることで、自然な話題展開でなかった焦りもあり、ゴルフをしない筆者にとって、その答えを聞いても、反応に困るような質問(65行)まで飛び出している。筆者はこの質問に対する答え(66行)「100切ればいいほうで」に反応しコメントしている(67行)が、これは明らかにその場しのぎの慌てた発話である。ここにはラジオでの会話というプレッシャーが筆者にもあったと思われる。冷静に考えれば「100を切るのが目標って言葉も、よく耳にしますけどね。」や「それでも始めたときに比べたらスコアはだいぶ良くなったんじゃないですか?」など、様々な切り返しが思い浮かぶが、これはラジオ(公共の電波)での会話であり、筆者は一瞬「Lは自分のことだから控えめに言っているけれど100を切ると、ゴルフをやる人にとってどれくらいのレベルなのかな?それをここで聞いたら、私がゴルフのことを全く知らないように聞こえてしまうな。そうすると恥ずかしいな。」といった思考が頭をよぎったのである。そこで、苦し紛れに発したのが(67行)であり、自然な会話を乱す異質な反応となってしまった。

ただ、スコアについての話は、これ以上展開ができないとスパッと諦め、違うトピックへと移ったのは、ぎこちない切り替えではあったが、その後のエピソード(68-78行)を引き出すことになり、功を奏した。

余裕があれば、もっと具体的にどんな美しさだったのか、その時の様子を聞き出したいところだが、直前の動揺から余裕がなくなり、そこまでの質問はできていない。

そして最後のまとめでは、なぜか「会えなくなる友達」の話をひっぱり出して締めくくろうとしている。いわばこのケースでも時間軸移動による会話のしめくくりをしようとしていたのだが、事前にその内容に触れている上に、そこで引き出した情報が不十分だっただけに逆効果になってしまっている。

筆者自身、なんだか話がしっかりまとまらなかったという不完全燃焼感があり、最後に「お友達と一緒に食べてもいいね」と、少しでも会話の最後を盛り上げようというコメントをしているが、焦りが影響して語尾が、いわゆるタメ口になってしまった。

このようにケースⅡにおける心理としては、聞き手としての筆者が、一度不自然な質問をして会話の流れに反してしまうと、それを精神的に引きずってしまう様子が明らかとなった。

4-3 会話の流れのチャート化(ケースⅡ)

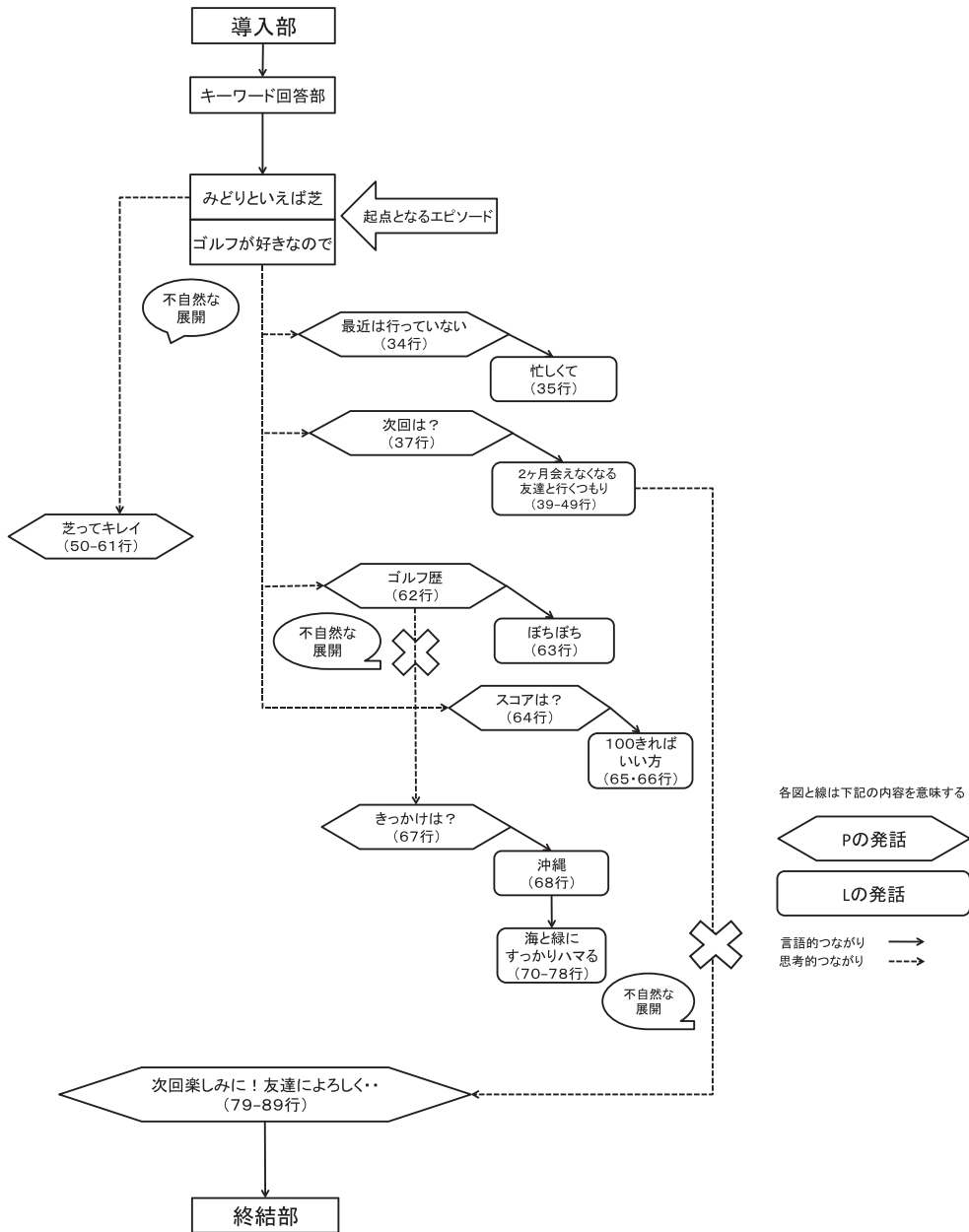
ケースⅡにおける以上の結束性・整合性の分析とPの思考的分析をふまえ、会話の流れをチャートに示す。(チャートⅡ参照)

4-4 チャートの再構築

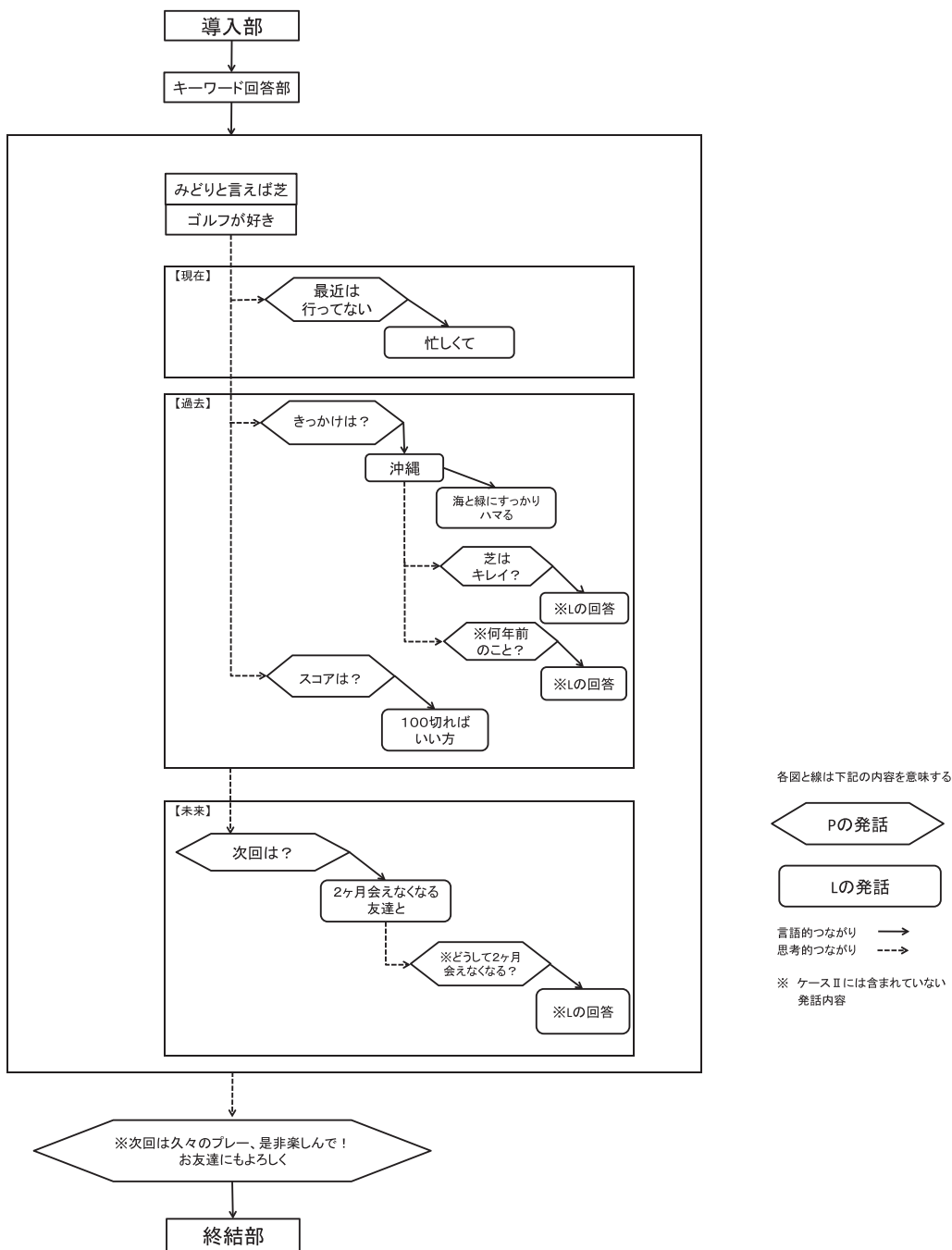
次に、ケースⅡのデータをもとに、結束性のある発話をまとめ、時間軸移動による質問によりテーマを展開することで、整合性のある会話を成立させるべく再構築したチャートを示す。(チャートRe:Ⅱ参照)

ゴルフが好きというテーマの起点から、まずは「最近は行っていない」ことや「きっかけ」といった「Lとゴルフの関係」について「現在」や「過去」の会話を進める。きっかけの中

【チャートⅡ】
 (ケースⅡの構造)



【チャート Re : II】
 (ケースIIの構造)



で沖縄のゴルフ場の美しさが出てきたところで、「芝」の話をするのであれば「芝」の話も前の発話と結束性をもって展開できる。さらにここで、その出来事が何年前だったのかを質問すれば「ぼちぼち」という回答ではなく具体的な数字によるゴルフ歴の回答が容易に引き出せたと思われる。

また、テーマの展開としてはPによる時間軸移動による質問「次回はいつ行きますか？」が有効であると考えられる。この質問をすることで(39-49行)が引き出せるはずであり、ここではもちろん、ケースⅡで欠落していた2ヶ月会えなくなる理由や具体的な日付も尋ねることが必要だ。その疑問を解消したあと終結部へとつながる発話をして全体をまとめることが望ましい。例えば「では、久々のプレー、お友達と楽しんでくださいね。」といった発話である。

二つの構図は、ほとんど同じ情報をもとにしていることから、いかに質問の「順番」が大切であり、時間軸移動による質問が会話の自然な流れを左右しているかが理解できる。

5. 「まとまりのある会話」について（ケースⅢ）

次に、時間制限が厳しく大きなテーマ展開がない会話であっても、筆者にとって満足度が高かった日を取りあげる。ケースⅢの会話は次の通りである。

(1月19日 エブリデー)

01 P：今日はコーヒー乃川島からウィンターコーヒーセットプレゼントです。

02 さ、番組のエンディングまで残り3分になりました。

03 出て頂けるかな？気づいてほしい！

04 (電話が繋がる)

05 L：もしもし

06 P：あ、もしもし 私 K-MIX Brand-New Junction の

07 宮本淳子と申します。

08 L：おはようございます

09 P：おはようございます。ラジオネーム 教えて下さい

10 L：ラジオネーム かなてん です

11 P：かなてんさん

12 L：はい

13 P：では キーワードもどうぞ！

14 L：エブリデー

15 P：ぱっちり(拍手)

16 L：すごい

17 P：よかったー。今日は3人目の当選候補者でした。

18 かなてんさん、おめでとうございます

19 L：ありがとうございます。

20 P：コーヒーのセット楽しみにしていて下さい。

21 L：はい

22 P：先ほど私、メッセージ ご紹介させて頂きました

23 ベビージュズを・・・

24 L：そうです

25 P：編んでいるんですね？

26 L：はい。そうです

27 P：姪っさんが産まれたということで

28 L：そうなんです。

29 息子の解きには全然余裕がなかったんですけど

30 P：はい

31 L：姪っ子は やっぱ 可愛くて・・・

32 P：あ、ご自身の息子さんの時にはやらなかったのに

33 L：(笑) やらなかったんです・・・

34 P：姪っさんの分を 今 作ってるよ

- 35 L：そう。せっせと編み始めました
 36 P：今、どれぐらい 出来上がってますか？
 37 L：あ、もう3足ぐらいは
 38 P：おーー
 39 何足ぐらい目標にしてるんですか？
 40 L：いや もう できれば たくさん・・・
 41 P：私、一足かと思ってたら・・・そうじゃないんですね
 42 L：(笑) そうなんです。もう編むと かわいくなって ちっちゃくて
 43 P：うわぁー そうですか
 44 L：はい
 45 P：何色のものが多いですか？
 46 L：あー やっぱり ピンクとかなんですけど
 47 ダーク系も ちょっと可愛いなと思って
 48 P：へえー。まだまだ当分 その編み物は続きそうですね ジャぁ
 49 L：もう 止まんないですね。
 50 P：ではそのお供に是非コーヒーを楽しんで下さい
 51 L：はい ありがとうございます
 52 P：はい 今日はどうもありがとうございました
 53 L：いいえ こちらこそ ありがとうございました
 54 P：失礼します
 55 L：はい 失礼致します

5-1 ケースⅢの結束性と整合性について

(01-12行)が導入部、(13-21行)がキーワード回答部である。電話を繋いだ相手のメッセージを番組の中で紹介していたことから、PがLに情報の確認を求める形(23・25・27行)で会話の起点となるテーマ「姪のベビーシューズを編んでいる」が提示されている。それに関してLは「息子のとき」を比べている(29行)が、これは起点となるエピソード内の「姪」と対比した関係であり、テーマを意識したつながりのある発話である。Pのあいづち(30行)を挟んでLは(31行)「姪っ子は やっぱ 可愛くて(ベビーシューズを編んでいる)」と語っているが、省略されている部分は(22-28行)と一致している。さらに「可愛くて」は「(ベビーシューズを編んでいる)理由」であり、(22-28行)で引き出された情報の「確認」だけにとどまらず、新規情報の提示にもあたる。これに対しPは情報を繰り返すことによる「確認」を行っており(32・34行)、それぞれにLも応じている(33・35行)。

そして、この後のPの質問(36行)は「(ベビーシューズは)今 どれぐらい 出来上がってますか？」であり、直前の(35行)「(ベビーシューズを)せっせと編み始めました」の発話と省略されている内容が一致しており、結束性が生み出されている。これに対する回答(37行)の後、(39行)でも「(ベビーシューズは)何足ぐらい目標にしてるんですか？」と、省略されている内容において、結束性が生じている。さらにPの質問である(45行)も「(ベビーシューズは)何色のものが多いですか？」であり、同様のことが言える。これに対するLの回答(46・47行)においても省略されている言葉は「ベビーシューズ」である。

さらに(48行)の「その」は明らかに「ベビーシューズ」であり、このケースでは、T1において「ベビーシューズ」という言葉の発話こそないものの、PとLの二者間では終始、共通認識がされており、二者間における「ベビーシューズ」についてという暗黙の了解があると推測できる。

このように全ての発話において生み出されている前後の結束性がT1の整合関係を形作っている。さらに、会話を終結部へと導くPの発話(50行)における「その」は「ベビーシューズを編むこと」であり、それをテーマとする(22-49行)の大きな会話節を意識した、包容

力のある発話である。

ただ、ここで注意したいのは(50行)における「コーヒー」である。会話節(22-49行)とは全く関係がなく、唐突に出てくるコーヒーに関する発話だが、ここには Sperber and Wilson (1986, 1995) による「関連性理論」の根幹をなす重要な概念である「最適の関連性」が成立している。

そもそも、PとLの意識には「このコーナーのプレゼントがコーヒーである」という共通認識があり、この発話でのコーヒーとはプレゼントのことであると容易に認識できる。それまでの会話の中では一度も出てこなかった「コーヒー」を入れることによって、むしろPとLの会話全体が一気にまとまりをみせており、会話の終結部への展開における二者間の共通認識を利用した発話の効果が認められる。

本ケースでは大きなテーマ展開はみられないものの、一つのテーマに関して新情報の提示がテンポよく行われることで、会話が「弾んでいる」印象があると考えられる。さらに、大きなテーマ展開がみられない中でも、「Lと編み物」に関して【現在】「今、作っている」—【過去】「息子のときは作らなかった」—【未来】「当分、編み物は続きそう」の時間軸移動が確認でき、Lから自発的に語られない場合は、Pが時間軸移動による質問をすることで、会話を進めていることも確認できた。

5-2 筆者のPとしての視点から

ここで、ケースI、II同様、現場での状況を思い出しながらPである筆者の視点(心理面)から、この会話を振り返る。

この日は通常に比べて1分から2分、リスナーとの会話の時間が少なくなっている状態である(01-03行)。ここに至るまで二人の当選候補者に電話をしているものの繋がらず、これが3人目の当選候補者への電話であった。あまりにも時間がないので、故意に「残り3分」という時間を告知して生放送の臨場感を出しつつ、電話が繋がったとしても、通常より短い会話になりますよ・・・というリスナーへの「おことわり」的ニュアンスを込めた発話であった。(ちなみに、番組終了間際には次の番組のパーソナリティと30秒～1分程のあいさつがある為、コーナーとしては残り2分程の状態である。)もちろん、「会話を短くまとめないといけない」という意識も強く働いている。

無事電話がつながり、導入とキーワードの回答もスムーズに進行(05-16行)。なかなか繋がらなかったという気持ちから、あえてここでも(17行)のコメントをしている。その後の起点トピックからの展開は、全て「ベビーシューズを編む」ことについての質問であり、それ以外にテーマの展開はしていない。これは残り時間が少ない為、多くの情報を聞き出せないのなら、提示されている一つのテーマについて詳しく聞いた方が、まとまりのある会話ができるはず・・・という感覚的なものである。一問一答のような(36・39・45行)の質問も、同じテーマに関するものであるため、おさまりの良い質問になっている。少々やつぎばやな印象のあるこれらの質問ではあるが、限られた時間の中でテンポよく会話を進めていくには有効であったと考える。もちろん「時間がないから主語を省略しよう」と思っていたわけではなく、一つのことについて質問する上で、ごくごく自然にこういった質問スタイルに至っている。

そして(48行)の質問「まだまだ当分 その編み物は続きそうですね。」は、明らかに「この質問でしめくくろう」という意図を持っての質問である。質問というより、むしろ「確認」の意味合いが強い発話である。未来のことを聞くことで話を締めくくるという方法は、経験的に習得したものであるが、一般的なインタビューでも「未来」に関する質問をして締めくくるというケースが多い為か、こういった質問をすると質問をされた側(このコーナーの場合はL:リスナー)も、これでインタビューは終わりだな・・・という気持ちを抱いている雰囲気が感じ取れる。

「確認」の意味合いが強いというのは、それまでの会話の中から、筆者はLの答えを推測できるものであるからである。本ケースの場合、この質問に関する筆者の想像通りの答えが(49行)「もう、止まんないですね」である。つまり、(49行)を期待して(48行)の質問をし、(49行)が出たところで(50行)「では、そのお供にコーヒーを楽しんで下さい」と会話をまとめようといった考えが筆者の頭の中では既に決まっていたのだ。「まとめ」のフレーズを用意して、それに繋がる質問をする＝「会話の逆算」といった要素が、ここにはある。

時間制限のある会話だからこそ、この「会話の逆算」が大きな役割を果たす。こういった場合には、最後の終結部へと、やや強引に話を展開してしまうことも多いのだが、それまでの話をまるごと集約できる「包容力をもったまとめのフレーズ準備」は、会話をダイナミックに終結部へとつなぐ、重要且つ有効な方法であったように思う。

5-3 会話の流れのチャート化(ケースⅢ)

ケースⅢについて、以上の結束性・整合性の観点とPの思考的のつながりをもとに、会話の流れをフローチャートで示す。(チャートⅢ)

6. 考察とまとめ

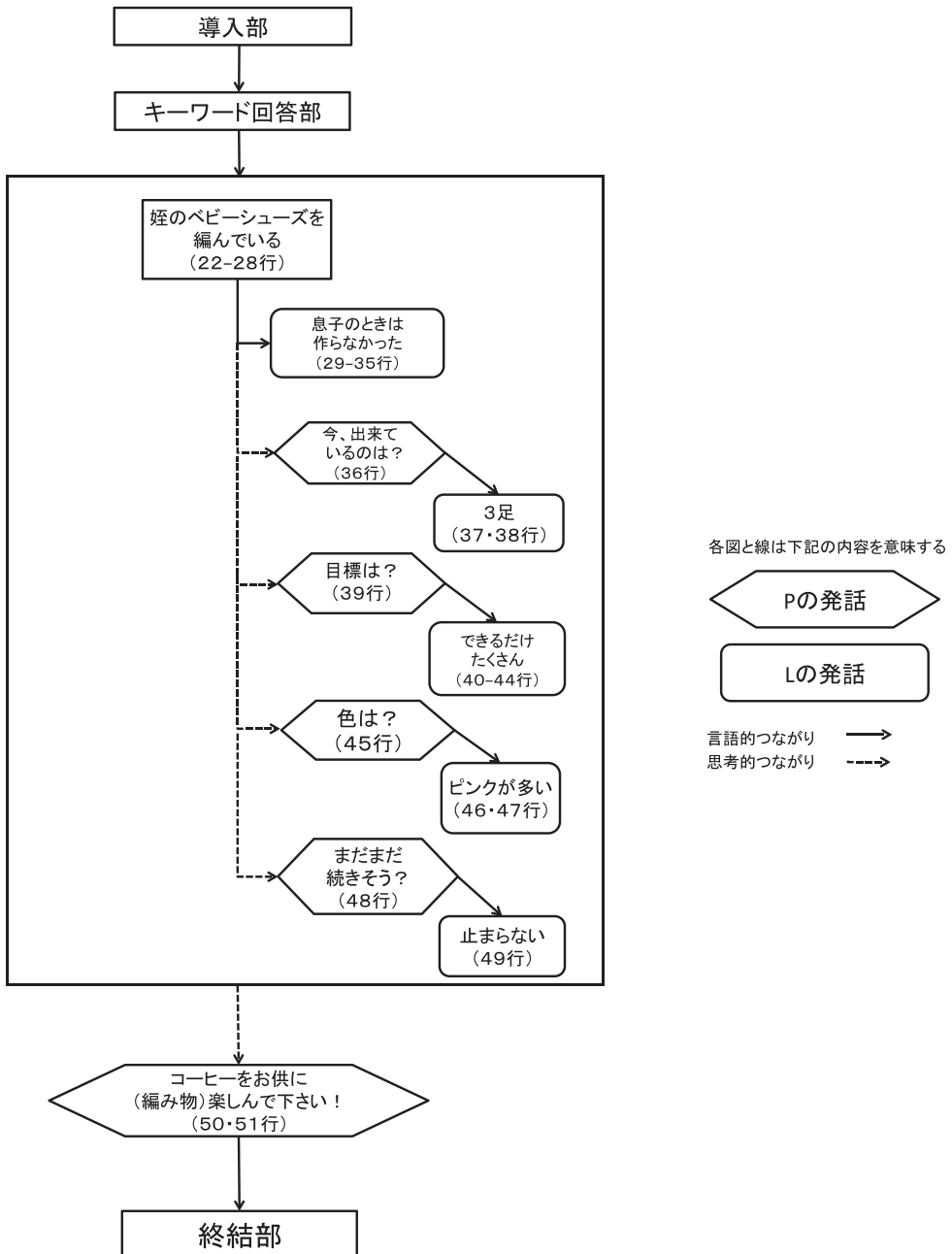
以上のケーススタディを考察すると、会話の当事者として「スムーズに会話が展開した」「話が弾んだ」「まとまりがあった」と満足感のある会話については、その構造においても美しく、明快な流れが確認できた。

さらに、今回の構造分析では、全てのケースにおいて「時間軸移動」による質問方法があることも確認できた。各ケーススタディでも言及しているが、ケースⅠではAとBを繋ぐ(59・60行)「また作る予定もありますか?」や(75行)「今日は無事成功しますように」、ケースⅡでは(37行)「次回、ゴルフに行く予定は?」、(62行)「ゴルフ歴は長いんでしょうか?」、(67行)「何かきっかけがあったんですか?」、ケースⅢでは(48行)「当分、その編み物は続きそうですね?」といった質問である。ケースⅡを理想のモデルに再構築したケースRe:Ⅱでも「きっかけ」や「次回」など、テーマになっているものと相手の関係について、時間軸を移動させる質問が二者間の会話の流れの方向性を決定づけるのに重要な役割を担っていることが分かった。

このような時間軸移動による質問は、回答が「はい・いいえ」となるクローズドクエスションではなく、何らかの形で受け手による新たな情報の開示が期待できるオープンクエスションとなる場合が多く、相手の発話を促すことができる点でインタビュー形式の会話には特に有効な質問方法であると考えられる。

また、時間軸移動を用いた質問は、バリエーションが豊かである。例えば過去へさかのぼ

【チャートⅢ】
 (ケースⅢの構造)



る質問では、「いつからですか?」「きっかけは?」「～のときは、どうでしたか?」「去年もそうだったのですか?」「毎年そうなのですか?」など、トピックの内容によって使いわけることができる。未来への時間軸移動であれば「今日はどうでしょう?」「今後はどうでしょう?」「どれくらい続くでしょう?」「次はいつでしょう?」といった具合である。こういったバリエーションの中から、話の流れに最もふさわしい質問を選び会話の流れを作ることで、一つの事象に関する、よりストーリー性のある内容が引き出せることになる。一般的に、ある人物に関して幼少期から振り返るといったインタビューは、この時間軸移動を用いた会話の良い例ではないだろうか。

さらに、本ケースでとりあげた会話では、相手にまつわるテーマを時間軸移動で質問した場合、質問の答えは常に相手自身（リスナー本人）でなければ分からないものである。裏を返せば、その信憑性について第三者から批判されることはない。公共の電波での発言であり、リスナー（一般人）とはいえ、「うっかり間違っただけを言えない」という心境の中で、他の誰にも批判される心配の無い質問に対しては、精神的負担が少なく済み、答えを容易に発話できるというメリットがある。つまり、時間軸移動による質問は話し手に過剰なストレスを与えずに発話を促せるのである。

一方、聞き手としては、時間軸移動を用いた質問と回答の連鎖が、会話の内容を全体でとらえたとき、一つの事象に関する「時間軸移動」（場面転換）を含む物語（ストーリー）として認識できるため、満足度が高くなるとも考えられる。ただ、ケースⅡのようにゴルフ歴を聞いた後、現在のこと（スコア）について聞き、再び「きっかけ」を聞いて過去にさかのぼるといったように時間軸の移動が頻繁に行われると、話の軸が定まらず逆効果になってしまうので注意が必要だ。

このような点を踏まえ、「時間軸移動の順序の規則性」にも注目すべきである。これについては、現在60～70ケースを調査中であり、時間軸移動によるテーマ展開の規則性を示すことを今後の課題としたい。

参考文献

- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
林 宅男（2008）『談話分析のアプローチ』研究社
筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版
井上 俊 上野千鶴子 大澤真幸 見田宗介 吉見俊哉（1995）『他者・関係コミュニケーション；岩波講座 現代社会学 第3巻』岩波書店
田窪行則・西山佑司・三藤 博・亀山 恵・片桐恭弘（1999）『談話と文脈』岩波書店